2026年10月4日（日）第573回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」

テレビ番組「相葉ヒロミのお困りですカー？」出演の舞台裏と三島の地域再生プロジェクトの展望

本稿は、NPO法人グラウンドワーク三島専務理事・渡辺豊博氏（通称ジャンボさん）が、テレビ番組「相葉ヒロミのお困りですカー？」採用に至る3度の企画提案、8月21日の長時間撮影の舞台裏、放送後の水の苑緑地の反響、同地の歴史的背景、再生後の維持管理計画、そして並行する「三島そば」プロジェクトの現況を、数値と事実を保った形で詳細に語った記録である。

テレビ番組出演に至るまでの経緯と舞台裏

渡辺氏は、源兵衛川中流の「水の苑緑地」再生を番組に採用してもらうために、4ヶ月前から段階的に企画提案を続けた。

初回は「荒れ果てた小川を蛍が乱舞し、小魚が泳ぐ水辺の楽校に再生」という骨子で、提案書・図面・写真を添えて応募するも他案件に採用が移った。

第2回は「要望過多」との指摘を受け、再構成した。

第3回では「水源2箇所・大池」に焦点を絞り、合計8項目の要望を3項目に圧縮して、プレゼンテーションを実施した。

テレビ朝日のプロデューサーと相葉氏・ヒロミ氏の最終判断により採用が決定した。決定は、オンラインでの直接通達（ズーム）で「行くぜ！」との宣言と共に通知された。

撮影は8月21日、朝8時集合から夜9時半まで約11時間に及び、休憩は30分弱、昼食は立食で行われた。

現場には、医師、テント、エアコン、ベッド（2台）、マッサージ師の体制まで整えられていたが、当人たちは一度も利用しないほどの集中で作業に没頭した。

酷暑（35〜36度）下でも安全を最優先に進める段取りが組まれ、ボランティアは120名が待機・参加した。

番組費用はテレビ朝日が必要経費を全額負担し、三島市の負担はゼロである。

ボランティアの人件費は含まれておらず、実質「4 回」にわたる現場対応を総計すると、総額「3000 万円以上」に相当する規模の労力が投入されているという。

渡辺氏の観察によれば、相葉氏・ヒロミ氏は「職人」さながらの集中力で、食事や休憩の勧めを退けてでも作業をやり切るプロ意識を示した。

ヒロミ氏は「社会性・公益性のある番組」であることを続ける理由に挙げ、困りごとの解決を通じて、地域が光を取り戻す「ドラマ」を重視していた。自らの技術を相葉氏に伝承し、次世代へバトンを渡す構えも語られた。

「水の苑緑地」再生プロジェクトの技術的側面と芸術性

再生対象の「水の苑緑地」は、源兵衛川中流部・かわせみ橋付近に位置する約 3200 平米（1000 坪）の湧水地である。

今回の作業では、空間デザインと安全対策が両立された。

景観面では、池を強調するために周辺の竹や樹木の扱いを精査した。

渡辺氏は「竹をもっと切り進めたい」意見だったが、ヒロミ氏は「緑の壁」を残す戦略を採り、光が入り過ぎると、全体が広がって見えて、池が小さく見えるため、緑の壁を残して、池を浮き立たせる視覚効果を選択した。

この設計は太陽の動きに伴う光の差し込み位置の変化まで織り込み、午前から午後にかけて、移ろう「光の美」を演出している。

造園作業は、溶岩の積み上げ、土の投入、イロハモミジやドウダンツツジの植栽・剪定など、職人のバランス感覚が問われる工程が連続した。

バイカモの生育には、直射の確保が不可欠で、上部の枝葉剪定を強行した。

ヒロミ氏の作業姿勢は、始まると休まず集中し、周囲の休憩指示も退けて自らの美学と機能要件の両立を追求する「職人」そのものだった。

安全上の要所は井戸修復だ。6m 級の井戸に約 30cm のヘドロが堆積しており、中央に約 3m のパイプが入った構造である。

酸欠リスク回避のため空気供給を行い、安全確認後に人が降りて手作業でヘドロ除去を実施した。

相葉氏が細身を活かして井戸に入り、しゃがみ姿勢でバケツ上げの連続作業に臨み、現場に歓喜をもたらした。

これに先立ち渡辺氏が、構造・安全を確認し、投入と回収の動線が成立するよう周辺で支援した。

番組放送後の反響と「水の苑緑地」の歴史的背景

放送は 9 月 24 日 19 時〜22 時（3 時間）。

翌朝 8 時半から現地の清掃に入ると、渡辺氏の周囲に約 100 人が集まるほどの盛況となり、来訪者は三島市民が 7〜8 割、他に山形・広島・岡山・東京からの訪問が確認された。

遠方勢の多くは、熱海に宿泊中に番組を視聴し、箱根行きの予定をキャンセルして水の苑緑地へ転進。

「前は暗くて怖かったが、こんな場所だったのか」「長年の管理に感謝」との声が続き、番組による地域認知と求心力の増大が明確に観察された。

水の苑緑地の歴史は、かつて「吉野水苑」という料亭が存在し、元はタイガーボード社長の別荘（木造 2 棟）？であったことに遡る。

前庭にコンクリート池があり鮎を飼育し提供、上流側は玉川用水の水源で鱒を販売する拠点だった。

1990 年頃に渡辺氏が、源兵衛川の計画を立案し、隣地は廃屋化していたが、水の湧出が豊富だったため一体的な整備を三島市に要請した。

約 2 億円で土地を購入・整備が進み、県主導の工事（源兵衛川計 15 億円）期間中はグラウンドワーク三島が管理した。

三島市への施設移管後は 12〜13 年が経過したが、「源兵衛川はグラウンドワーク三島が管理、水の苑緑地は三島市が管理」という口約束のもと、財政事情もあり、水の苑緑地の管理は手薄になり、長期の放置に至った。

今回の番組で劇的な再生が行われ、同地は市民の新たな憩いの場・水の庭園として再認識されている。

再生された「水の苑緑地」の価値と今後の維持管理計画

再生後の水の苑緑地は、水温計測で 13 度という非常に冷涼な湧水が確認された。一般的な湧水が 15〜16 度であるのに対し、富士山の深い源泉由来に近い水質で、柿田川（12〜13 度）に匹敵するレベルである。

これにより、バイカモの生育に最適な環境が保証された。実際にバイカモの植栽は成功し、現在も美しく生育している。

竹は伐採後の再生が早いため、定期的な細茎の切り戻しが必要であり、落葉期には箒による清掃が有効で作業負荷の軽減に直結する。

永続的な維持のため、NPO 法人グラウンドワーク三島のホームページで「水辺のサポーター」募集を開始した。

毎週木曜 9 時半から約 1 時間、水の苑緑地での簡易清掃・竹の剪定などのボランティア参加を呼びかけている。

地域運動の本旨は、景観の美しさを保ちつつ、無農薬の作物や健全な環境を市民へ返すことであり、耕作放棄による荒廃を未然に防ぐ公共価値の創出にある。

将来の展望と三島そばプロジェクトの紹介

番組側からは「この後 1 年間、いつか突然来ますから」との抜き打ち再訪が予告されている。

具体日程の事前告知はなく、プロデューサーの口からも「教えません」とされるため、渡辺氏は自身の経験から「来年 5 月頃」の来訪を予測し、継続的な美化・管理に備える姿勢だ。

一方で、箱根西麓・本山の畑（1 ヘクタール）で進める「三島そば」プロジェクトの近況が紹介された。

今回は 3000 平米で種まきを実施。三島は江戸期から宿場町として蕎麦・うどんが名物であり、箱根で栽培が途絶しかけた種を約 25 年前に継承した歴史がある。

昨年は約 420 袋（約 800 食分）を販売。石臼挽きにより熱をかけず香りを引き出す製法にこだわり、無農薬で健康的な食品を提供した。

白い蕎麦花の一面の景観と富士山の眺望が広がる時期の PR も継続予定で、蕎麦教室では石臼挽き粉を用いた手打ち実習も行う。

あわせて、農地 3.5〜4 ヘクタールの景観維持と雑草化防止のため、地域の手を借りた継続管理が必要である。